

2014年11月21日

AAAL 2014 サンパウロ国際モーターショー視察 報告書

■企画／主催 オートアフターマーケット活性化連合（AAAL）
 ■旅行企画実施 近畿日本ツーリスト(株) ECC 営業本部 第2 営業支店

■期間／旅程 2014年10月31日（金）～11月10日（月） 11日間

■期間／旅程

1日目	10月31日(金)	成田発 ニューヨーク着 ニューヨーク発	移動日
2日目	11月1日(土)	ブラジル サンパウロ着 サンパウロ市内視察	・KogaKogaサンパウロ店(カー用品店) ・VOLLI(カー用品店) ・在ブラジル日本商工会議所 天谷氏による講演
3日目	11月2日(日)	サンパウロ視察	・サンパウロ国際モーターショー(自由視察) ・オートモール視察(※モーターショーのため休業) ・アイルトン・セナ墓地訪問
4日目	11月3日(月)	サンパウロ発 イグアス着	・自由視察
5日目	11月4日(火)	イグアス滞在	・自由視察
6日目	11月5日(水)	イグアス視察 イグアス発 リオデジャネイロ着	・自由視察
7日目	11月6日(木)	リオデジャネイロ滞在	・在リオデジャネイロ日本国総領事館訪問・セミナー
8日目	11月7日(金)	リオデジャネイロ視察 リオデジャネイロ発	・H-Centro(トヨタ・ホンダ公認の修理工場)
9日目	11月8日(土)	ニューヨーク着	・自由視察
10日目	11月9日(日)	ニューヨーク発	移動日
11日目	11月10日(月)	成田着	移動日 成田到着後解散

■参加者（17名）

※順不同・敬称略

1	株式会社オートバックスセブン	森本 弘徳	取締役副社長 執行役員 ※団長
2	株式会社タクティ	七瀬 功	参与
3	株式会社オートバックス ファイナンシャルサービス	住野 泰士	代表取締役会長
4	株式会社ボンフォーム	西脇 保彦	代表取締役社長
5	株式会社カナック企画	金子 高一郎	代表取締役社長
6	株式会社クレトム	白神 博	代表取締役社長
7	株式会社カーメイト	井上 満	上席執行役員
8	エステーオート株式会社	棚橋 公三	相談役
9	武蔵ホルト株式会社	淵田 昌嗣	社長執行役員
10	株式会社エッチ・ケー・エス	長谷川 浩之	代表取締役社長
11	株式会社ワーク	田中 毅	代表取締役社長

12	ブリッド株式会社	高瀬 嶺生	代表取締役社長
13	株式会社トムス	舘 信秀	代表取締役会長
14	株式会社トムス	藤田 明	専務取締役
15	有限会社フォルテシモ	坂本 佳子	マネージャー
16	日本自動車用品・部品 アフターマーケット振興会	植草 正拓	事務局長
17	近畿日本ツーリスト	宮城 和加子	添乗員

—— 11月1日（土）サンパウロ市内視察 ——

カー用品店 Kogakoga サンパウロ店

日系人である古賀孝則氏により 1968 年に設立されたカー用品店。店名の Kogakoga（コガコガ）は設立者の古賀氏の名前に由来する。

訪れたサンパウロ店は自ら大型スーパーと名乗るだけあって敷地面積 6000 m²と大きい。商品アイテムは大きなストックスペースを持つ補修部品をメインに油脂類、ワイパーやバッテリーといった消耗品の品揃えが豊富であるが、オーディオ関係、アクセサリ類は日本のように洗練されたものではなく、その種類も限られる。当日は、週末ということもあり駐車場はほぼ満車状態、店内も買い物客で比較的賑わっていた。

基本的にクルマに関しては DIY 文化が根付いているようで、一世代前の米国の大手チェーン PEPS BOY のような雰囲気がある。

なお、Kogakoga はブラジル国内に 3 店舗を構える。



Kogakoga サンパウロ店全景

売場



レジカウンター

向かいにも補修品を扱う別店舗が数店並ぶ地域

カー用品店 VOLI 空港店

サンパウロに3店舗を構えるカー用品店 VOLI（ポリ）、こちらも日系人が経営しているブラジルで人気の高い店舗とのこと。

大きな外観の店内は天井が高く、一部オーディオ等の高額商品を展示してある2階のフロアがあるものの売り場面積の割に商品の陳列に無駄が多い。また店内は閑散としていたが店舗に隣接するピットには多くの作業待ちの車を見ることが出来た。

品揃えは Kogakoga と同様に補修部品をメインに油脂類、消耗品の品揃えが多かったがタイヤに関しては多くのスペースを割いている。

VOLI は、オイル交換といった日常的な作業から、エンジン調整をはじめタイミングベルトやウォーターポンプ、パワーステアリングポンプ等の交換、足回りに関わるアライメント調整や各種ブッシュ類、ショックアブソーバーのチェック・交換といった日本で云うところの整備工場的な作業を得意としている。

ピットの様子や比較的綺麗な高年式車が並ぶ駐車場から推測すると、先の Kogakoga に比べ自ら手を汚して作業をする人たちではなくワンランク上の客層をターゲットとした店舗作りを行っているようである。



VOLI 空港店



店舗に隣接するピット入口



1階売場

—— 11月1日（土）在ブラジル日本商工会議所による講演 ——

ブラジル サンパウロ到着、初日の夕食会時にカナック企画の金子代表（JAAMA 会員）のご紹介で在ブラジル日本商工会議所に在籍する天谷浩之氏（機能強化委員会アドバイザー）による講演を聞く機会に恵まれた。

講演内容は別資料の通り、ブラジルの基本情報、在ブラジル日系企業の動向、自動車に関わる情報、ブラジル経済の根幹等について限られた時間の中ではあったがお話していただいた。

講演内容で特に印象に残った事項は、ブラジルの総人口は世界第 5 位で 2 億人弱。その内約 1 億 3000 万人は南東部（リオ・デ・ジャネイロ州、サンパウロ州他）と南部（パラナ州、サンタ・カタリーナ州他）に集中していて、この地域に多くの日系企業が進出していること。

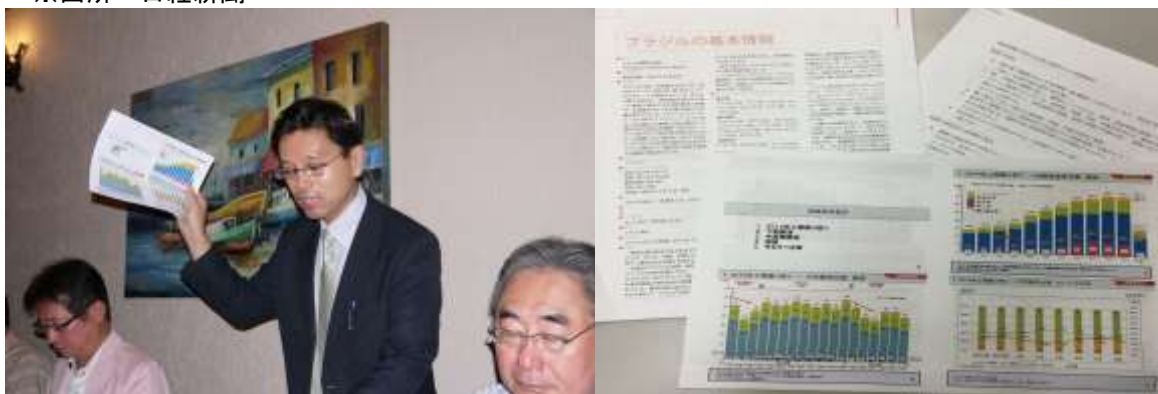
また、ブラジルでのビジネスを考える場合、50 種類を超える多数の税と一度上げた給与を下げる事ができず、更に毎年ベースアップしなくては行けないという労働者保護による労使問題、さらに鉄道網が整っていないため、大陸ゆえ長距離を車に頼らざるを得ない輸送コスト等を考慮しなくてはならないこと。

実際、渡伯しミネラルウォーターや軽食類を購入してみると思いのほか物価の高いことを実感。日本国内では大衆車であるカロラ、シビックが 9 万レアル（約 450 万円）、フィットでさえ 5 万レアル（約 250 万円）するという。特に自動車に関する税が高額で車両価格の 46%が税金というから驚きである。

ちなみにブラジル国内での 2013 年度の各自動車メーカーの販売シェアは次の通り。

フィアット：21.3%、VW：18.6%、GM：18.1%、フォード：9.3%、ルノー：6.6%、現代：5.9%、トヨタ：4.9%、ホンダ：3.8%、日産：2.1%（日本車トータル約 11%）、その他

※出所 日経新聞



ご講演いただいた在ブラジル日本商工会議所の天谷浩之氏

貴重な資料をもとに講演が進められた

—— 11月2日（日） 第28回サンパウロ国際モーターショー14視察 ——

<モーターショー概要>

- ・会 期 2014年10月30日（火）～11月9日（日） 11日間
- ・開催地 ブラジル サンパウロ
- ・会 場 Anhembi（アニエンビー）
- ・入 場 料 32～80レアル（約1,500～4,000円・入場日、条件により異なる）

サンパウロ国際モーターショーは、世界5大モーターショー（東京モーターショー、フランクフルトモーターショー、北米国際オートショー、ジュネーヴ・モーターショー、パリサロン）の枠からは外れており華やかさも含め規模的には余り大きくはないショーである。しかしながら自動車主要産業国での開催ということでパイプの太い主要自動車メーカーは大きなブースを構え熱のこもった

出展を行っていた。

このショーは、どちらかという一部展示のあるコンセプトカーといった未来志向のモデルを見せるというよりも、現行車あるいはニューモデル（発売予定）といった、より現実的な車達を出展することにより、入場者の購買意欲をかき立てるといったショーではないかとのイメージを受けた。現に来場者は、個人あるいは家族で思い思いの車に乗り込み室内空間、シートポジションやトランク容量等を確認していた。また、メーカー側もこれを拒否することなく快く受け入れていた。お国柄なのか会場でビールの販売もしており、それを手に持ったまま車に乗り込む姿は日本では考えられない様子だった。

現地の方に聞いたところ、日本に比べ高い入場料の対価は自分のお目当ての車が一堂に揃っていて自由にじっくりと内外装を確認できることだという。



サンパウロ国際モーターショー14 会場前にて



会場配置図からもコンパクトなショーであることがわかる

会場内の様子（ブラジル国内で人気の高いスズキのブース）



トヨタブース カラーベースのレース仕様車の展示



デトロイトショーで発表されたコンセプトカー『FT-1』



先日国内で発売されたばかりの燃料電池自動車『FCV』の
コンセプトモデル プリウスの展示もあった



ブラジルでは各メーカーが SUV、RV、ピックアップトラック
といったジャンルに積極的に力を入れている



日産ブース



日産は2つのブースに分かれての展示



ブラジル向けに製作された『キックス・コンセプト』



『GT-R (R35)』の展示 触れない展示車両は人気が無い？



ホンダブース 小型車が中心の展示コーナー



発売が待たれる NSX のコンセプトカーも展示されていた



ホンダの燃料電池自動車『FCV コンセプト』



ブラジルで来年発売予定の新型『HR-V（日本名：ヴェゼル）』



三菱ブース



前回 2013 年の東京モーターショーでも展示されていた
プラグインハイブリッド車のコンセプトモデル『GC PHEV』



スバルブース



今年のジュネーブ・モーターショーで初公開された次世代
クロスオーバーハイブリッド車『VIZIV 2 コンセプト』



VW ブース



今回初公開、南米市場専用のサベイロをベースとしたスポーティグレード『サベイロ・サーフ』



BMW ブースはMシリーズやi3、8といったスペシャルモデルの展示に力を入れていた



日本では馴染のないブラジルの老舗メーカー『トロラー社』現在はフォードの傘下にある



中国や韓国といったメーカーの出展もあった



唯一オーディオメーカーの出展社 パイオニア



ポルシェやフェラーリ、マセラティといった高級車を購入する富裕層も存在し、渋滞を理由に週末のみ使用するとのこと





ブラジル国内でシェアトップのフィアットは、小型車の展示に工夫を凝らしている



アウディは昨年ル・マン 24 時間耐久レースで 2 年連続総合優勝を果たしたハイブリッドマシン R18 e-tron Quattro (2013 年モデル) を展示

多くの展示車が乗れて触れる 4 割近くが 10 クラスの小型車というブラジル市場だが近年減少傾向にあるという こういった大排気量のスポーツカーにあこがれる人も多いと聞く

【主な出展自動車メーカーのトピックス】※出所レスポンス

- 日産は、2 年前の 2012 年のサンパウロモーターショー12 で同社が初めてブラジル向けにデザインし、ブラジルで製作したコンセプトカー『エクストrem』(EXTREM) を初公開したのに続き、今回もブラジル向けに製作されたコンセプトカーでワールドプレミアとなる小型クロスオーバー車『キックス・コンセプト』を初公開した。(画像有)
これは、サンパウロ市街地のグレーに、明るいサンセットオレンジを組み合わせ、ブラジルらしさを表現したというデザインコンセプトで、設計は日本のグローバル・デザイン・センターが主導。これに、米国サンディエゴとブラジル・リオの 2 か所の日産デザインアメリカのチームが加わり、共同で作業が進められた。
- ホンダは、新型『HR-V (日本名：ヴェゼル)』(画像有) と『CR-V』マイナーチェンジモデルのブラジル仕様市販予定車を初公開した。
新型『HR-V』は、2015 年にブラジルで発売予定。SUV の力強さ、クーペのあでやかさ、ミニバンの使いやすさを高次元で融合した HR-V に、ブラジルでは 1.8 リッター SOHC i-VTEC フレックスフューエルエンジンと CVT を組み合わせて搭載。ワンクラス上の走行性能と低燃費を実現している。
また、『CR-V』は新デザインのフロントグリル、ヘッドライト、バンパーに加え、室内の質感、装備を充実。2015 年前半にブラジルで発売を予定している。
- VW は『フォックス』の「ペッパーエディション」を初公開した。(画像有)
フォックスは 2004 年に発表された主に中南米で販売している、ブラジル工場生産される『ポロ』よりも、ひと回り小さいコンパクトカー。「ペッパーエディション」は、最新型の『フォックス』をベースにしたコンセプトカーで「スパイシー」をテーマに、内外装をスポーティかつ若

々しく表現した。ボディカラーは、レッドトルネード、ルーフは黒で仕上げ、フロントバンパーは専用デザインで、新型『ゴルフ GTI』モチーフのメッシュパターングリルも装備。フェンダーには、樹脂製のエクステンションを追加する。室内には、ツートンのレザーを採用しステアリングホイールは、新型『ゴルフ』に近いデザインとした。ESC やトラクションコントロールなど、安全装備も充実。搭載エンジンはエタノール燃料にも対応した 1.6ℓ直列 4 気筒ガソリンで、最大出力 120hp。6 速 MT との組み合わせで、0-100km/h 加速は 9.8 秒、最高速は 189km/h と公表されている。

VW は、もう一台『サベイロ・サーフ』も初公開した。

これは南米市場専用の小型ピックアップトラック『サベイロ』をベースに若い顧客へのアピールを強化したスポーティグレードである。車名の『サベイロ』は、ブラジルの伝統的フィッシングボートの名前に由来している。もとは南米専用の小型車『ゴル』をベースに開発され、1984 年に初代モデルを発売、現行型は 2009 年夏に発表された 5 世代目モデルになる。また初代『サベイロ・サーフ』は、2002 年に発表されている。

『サベイロ・サーフ』の外観は、2 ドアボディに歴代『サベイロ・サーフ』と同様、専用メッシュグリルや 15 インチアルミホイールなどでスポーティさを表現。サーフボードなどの長尺物を簡単に固定できるようにした機能的な荷台を組み合わせたデザインとなっている。室内は、合成レザーシートやグレーのトリムパネル、アルミペダルなどが採用されている。エンジンは 1.6ℓ直列 4 気筒の「VHT」（フォルクスワーゲン・ハイ・トルク）ユニット。南米向けらしく、ガソリンとエタノールの両燃料に対応したフレックスフューエル車となるのが特徴で、最大出力はガソリン使用時が 101hp、エタノール使用時が 104hp となる。

- フィアットは、コンセプトカーの『FCC4』を初公開した。

『FCC4』は、フィアットの南米デザインセンターが開発を担当。「4 ドアクーペ」をテーマに冒険スピリットを持ったコンセプトカーとしている。デザインは、ブラジルで人気のピックアップトラックにクーペモチーフを組み合わせたもので、現代において SUV のクーペは珍しい存在ではないが、ピックアップトラックにクーペデザインという新たなものとなっている。『FCC4』のボディサイズは、全長 5000mm、全幅 1940mm、全高 1600mm。ボディカラーは新色のメタリックブルーで塗装し、存在感をアピールした。

- ルノーのダチアブランドは、コンセプトカーの『ダスター・オロチ』を初公開した。

元々はルーマニアの自動車メーカーであるダチアは、1966 年創業と長い歴史を誇る。当初はルノー車をノックダウン生産していたが、1980 年代半ばから、オリジナルモデルを開発してきた。しかし、1990 年代に経営が悪化、1999 年にはルノーの傘下に入り、経営再建に取り組んだ。現在では、ルノーグループの低価格車を開発・生産する重要な役割を担う。

ベースとなる『ダスター』は、ダチアの主力 SUV。今回のコンセプトカー『ダスター・オロチ』では、そのピックアップトラック版としている。設計は、サンパウロにあるルノーの南米デザインセンターが手掛けており、大人 5 名が乗車できる広い室内にリフトアップされた最低地上高、18 インチのタイヤとホイール、サイドプロテクトモールなどを採用。「どこにでも行ける車」として、機動性をアピールする。

なお、ルノーによると南米の LCV（軽商用車）市場においてピックアップトラックは、およそ 75% の市場シェアを占有し、年間 92 万台以上の市場規模を持つという。ルノーはすでにピックアップトラック市場への参入計画を発表しており、今後少なくとも 2 車種を投入する」と説明している。

- フォードモーターは、トロラー社の『T4』の「オフロードレスキューコンセプト」を初公開した。

トロラー社はジープタイプのオフロード車を得意とする 1955 年ブラジルに設立された老舗自動車メーカーで、2007 年 1 月にフォードモーターが買収し、現在は同社の傘下にある。

「オフロードレスキューコンセプト」は、2014 年に大幅改良を受けたばかりの主力 SUV 『T4』の最新型をベースに名前通りのオフロードでの救援車両をイメージしたコンセプトカー。

市販車の『T4』に、シュノーケルやウインチなどを追加。サスペンションも専用チューニング、17インチのアルミホイールにオフロードタイヤを装着し過酷なオフロードで本領を發揮する仕様としている。ボディカラーはツートンで、内装はブラウンとタンの組み合わせ。ボディサイドには、LEDライトを追加している。

●GMは、シボレー『オニクス』の「トラック・デイ」を初公開した。

ベースとなる『オニクス』は、強豪ひしめくブラジル小型車市場向けに開発された小型5ドアハッチバック車で2012年のサンパウロモーターショー12でのワールドプレミア。

1.0ℓと1.4ℓの2種類のカソリンエンジンにトランスミッションは5速MTに加えて、『クルーズ』や『ソニック』と同じ6速ATもラインナップ。GMの最新インフォテインメントシステム、「マイリンク」も設定されている。

今回、初公開された「トラック・デイ」は、『オニクス』をベースに、サーキット走行をイメージしたコンセプト車で排気量をアップし、サスペンションやブレーキ、エグゾーストシステムをサーキット用にチューニングしている。エクステリアは、ブライトイエローのボディカラーに、前後スポイラーなどのエアロパーツを採用。タイヤサイズは215/45R17で1.8ℓ直列4気筒カソリン「エコテック」エンジンは、ブラジルらしくエタノール燃料にも対応。最大出力は150hp以上を発生する。

GMは、もう一台シボレーブランド『S10』の「ハイ・カントリー」を初公開した。

『S10』は、シボレーブランドの小型ピックアップトラックで米国では1982年から2003年までの21年間販売された。その後、後継車のシボレー『コロラド』が登場し、『S10』の名前は米国では消滅しているが、ブラジルでは2012年に現地生産が始まった『コロラド』を『S10』の名前で販売している。この『S10』をベースにしたコンセプトカーが「ハイ・カントリー」で、ボディカラーは赤いメタリック色の「レッドチリ」で塗装。ダーククロームの18インチホイールを履いている。インテリアは、2015年モデルの『トレイルブレイザー』のイメージを踏襲し、ツートンレザーやグロスブラックパネルなどが採用されている。

さらにもう一台、GMのシボレーブランドは『コバルト』のカスタマイズコンセプトカーを初公開している。

初代『コバルト』は『キャバリエ』（1996-2000年トヨタが日本でも販売）と『プリズム』を統合して2004年に誕生したモデルで、4ドアセダンと2ドアクーペの2種類が用意されている。北米向けは2010年に後継車である『クルーズ』に継承されることで生産が終了しているが、2011年11月に新型の『コバルト』を北米を除いた欧州、アフリカ、中東、南米など、世界の約40市場へ投入した。開発はGMのブラジル部門が主導し、GMの世界3拠点で生産中である。ボディサイズは、全長4479×全幅1735×全高1514mm、ホイールベース2620mm、大人5名が快適に過ごせる室内スペースとトランク容量は563ℓ（VDA計測法）が確保されている。エンジンは1.3~1.8ℓの直列4気筒を設定されており、最初に投入されたブラジルでは、カソリンとエタノールの混合燃料に対応したフレックスフューエル仕様の1.4ℓと1.8ℓがラインナップされた。今回初公開されたカスタマイズコンセプトカーは、『コバルト』のパーソナライゼーションを提案した1台で、グリルはフレームをダーククローム、内部をグロスブラックで仕上げ、専用の16インチアルミホイールを装着した。インテリアは黒基調でまとめ、ダークレザーとライトグレーの刺繍を使用し上品さと洗練さを表現している。

モーターショー視察終了後、会場近くにある自動車ディーラーの集まるオートモールへ向かったがモーターショー開催期間中のせいなのか、「現代」以外は全てクローズド状態であった。そのため予定を変更し1994年サンマリノGPで亡くなったアイルトン・セナ（アイルトン・セナ・ダ・シルバ）が眠る、サンパウロ市にあるモルンビー墓地を訪れた。



—— 11月6日（木）在リオデジャネイロ日本国総領事館訪問・セミナー ——

ブラジル リオデジャネイロ滞在時に在リオデジャネイロ日本国総領事館を訪問することができた。これは JAAMA 西協理事長（ボンフォーム代表）の手配により実現したもので、改めてこの場を借りてお礼を申し上げます。

セミナーの内容は別資料の通り、ブラジル経済について、自動車産業の概要、同現状、ブラジルにおける経済上の課題等についてレクチャーいただいた。

主な補足説明は以下の通り。

- ・ブラジルは経済成長率から見て停滞気味である。これは隣国の輸出先であるアルゼンチンの経済破綻が大きな原因の一つである。
- ・車のシェアは VW、フィアット、GM、フォードといったビッグ 4 が占めているが、近年減少傾向にある。逆に現代はデザイン・スタイルがブラジル人好みという理由から 2013 年は伸びている。
- ・国民全体の生活水準が上がってきており、中間層が車を欲しがっている状況。
- ・トヨタ、ホンダ、日産、三菱が進出していてトヨタは順調。日産は今年 4 月に新工場をリオデジャネイロに建設、1500 名の雇用も行った。2016 年までに 5%のシェアを目標としている。
- ・街中では余り見かけないエコカーに関して、ハイブリッド車は工業製品税を下げるなど政府もその普及に力を入れている。また、ガソリン車増でエタノール燃料の製造自体は下降気味。ガソリンに関しては国営企業であるペトログラス社が国策として海外から輸入したものを国内で安価に販売していることから、ブラジル政府としてはエタノール車のシェアを増やしたい意向である。
※訪伯時の価格（ℓ、円換算） ガソリン：130 円 ハイオクガソリン：140 円 エタノール 80 円
- ・カー用品では、特にカーナビの盗難が多いと聞く。
- ・ブラジルコストに関しては、サンパウロで聴講した在ブラジル日本商工会議所の内容と同様、労働者保護に起因する多発する労働訴訟、物価上昇率にリンクする高い人件費（今年 6.5%アップ）、多種多様な税金、人的物的なインフラの未整備（特にトラック、船に頼ることによるコスト、輸送時間問題）、複雑な政治事情により政治関係が停滞することもある。また、治安に関してテロは無いが盗難、殺人が多い。リオデジャネイロ州だけで殺人は日本全体の 17 倍、強盗は 230 倍とのこと。



— 11月7日（金）H-Centro視察 —

リオデジャネイロ最終日にトヨタ及びホンダ、両社の公認を受けているという修理工場の視察を行った。修理は多岐に渡り、オイル交換といった一般的なメンテナンスから整備、また板金作業まで行う。空調設備は無くパテ研ぎの粉が舞う工場内は、日本と比べると決して労働環境は良いとはいえないが、ブラジル国内の他のところと比べればまだ恵まれているとのこと。



視察に伺った H-CENTRO 社

同社のサービスメニューが看板になっている
設備は充実している



アフターのアルミ、純正補修パーツやアクセサリ類をディスプレイする

ブラジルの人達はとてもフレンドリー



説明を受ける参加者達

トヨタ、ホンダ車以外の入庫もある



板金、調色、塗装といった一連の作業をここではこなす

——最後に——

今回のツアーは、ブラジルのサンパウロ、パラナ（イグアス）、リオデジャネイロの3州を回り、サンパウロモーターショーを中心にそれぞれ自動車に関連した施設の視察を行ったほか、自由視察でブラジルを肌で感じてきた。

正直、メイン視察先であったサンパウロ国際モーターショーは、規模は小さく現行車はその多くを占め、コンセプトカーといった展示物に真新しいものがないなど、他のモーターショーと比べると見劣りするものではあった。しかしながら考え方を変えると、実際に会場で感じた「購入したい、乗ってみたい車」を実際に見て触れる場として捉えれば、それはそれで正しい一つのモーターショーの姿なのかもしれない。

ブラジルは、街中を見ている走っている車は小型車ばかりだ。各自動車メーカーもターゲットゾーンである小型車のショー出展に余念がない。だが、現在約4割を占める1ℓクラスの小型車も近年減少傾向が進み、ステップアップの波が近くまで来ていると聞く。

在ブラジル日本商工会議所や在リオデジャネイロ日本国総領事館の情報では、多種多様で高額な税制、一度上げた給与を下げるができない労使関係、交通インフラ、治安等々、多難な問題を抱えているという。こういった問題をクリアすることは、まだまだ時間も掛る難しいことではあるが、これらの問題を解決していくことは、ブラジルという国がこれからまだまだ伸びていく可能性があることを再びアピールすることになるだろう。その証拠に、既に日本の大手企業が進出を果たしてシェア拡大に努めている。

ブラジルは日本のほぼ真裏に位置することから移動時間等を考えると、こういった機会が無ければ気軽に行ける場所ではない。そういった意味で今回の参加者の多くは同様の考えであったと思う。文献等で知りうるブラジルと実際に足を運んだブラジルとの違いは三者三様ではあると思うが、片道24時間の移動時間と引換とはいえ、文献やネット情報等では決して得られない現地を肌で感じられたことは、参加者にとって貴重な経験であったと確信している。

以上

日本自動車用品・部品アフターマーケット振興会（NAPAC）
事務局長 植草 正拓